

ジョン・K・ネルソン 著

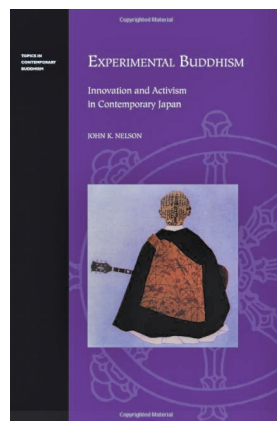
『実験仏教——現代日本における仏教の革新と行動主義』

John K. Nelson. *Experimental Buddhism: Innovation and Activism in Contemporary Japan*. University of Hawai'i Press, 2013.

ブライアン・ボツキング

「小さな島国に二十万五千人の僧侶がいて、七万六千を越す正規の寺院を運営している。その社会的インパクトはいったい如何なるものなのか考えてみてほしい」と著者は冒頭、問いかける。「世界有数の豊かで革新的なこの国に、仏教寺院とその僧侶たちはどんな貢献をしてきたのか？」(p.iii) この問いは、日本の寺院僧侶について本書が探究する問題のパラメーターでもある。このようにはつきり特定できる(そして大半が男の)集団には、かなり多様性があると著者は言う。日本にあるのは仏教宗派の集合体だけで、宗教哲学としての仏教がなかりか(p.v)、個々の寺院は大半が親から代々うけつぐ家業であり、生存のためには変化するマーケットに適応しなければならない。二十世紀末の日本は好景気

沸き、寺院の収入の八五%を占める葬式や法事に投じるキャッシュがふんだんにあつたが、二十一世紀にはいつて景気が低迷すると、地方の人口は減りつづけ、宗教への懐疑を含め、近代後期に特有の個人主義が顔を出すとともに、市場に聡い葬式産業企業から挑戦をうけるようになる。こうして多くの寺院が未来の不安にさらされる。寺院の後継者たちはあまり家業を継ぎたがらず、僧侶としての個人的、知的な資質に欠け、ビジネスノウハウもなく、傾きゆく家業をたて直す動機にも欠けている。『寺院の現在』という雑誌に寄せられたある僧侶の投稿によれば、僧侶が集まるとまず話題になるのは宗派本部への上納金についての不満であり、次いで要求ばかりしてくる檀家について、また総本山との関係に



ついでにグチ、そして最後にはゴルフ、カラオケ、女の話になるのだという (p.52)。

どうやらこれが日本の僧侶の大多数のあり方のようだが、本書はこうした趨勢を外れた例外ケースを探っていく。たとえば新しいアイデア、新しい活動、寺院仏教の新しいモデルを模索する(二人の女性を含む) 僧侶たちだが、こういう試みを著者は総じて「実験仏教 (experimental Buddhism)」と呼んでいる。著者が優先的に取材したのは、法事など寺院本来の業務を主力とする「平均的な」四十五の寺院で、サンプル数の少なさについてはきちんと断つてある。この分野にあまり詳しくない人たちのために日本仏教史の「あらまし」が語られたのち、仏教に触発された行動主義や社会福祉活動の実例(第三章)、「実験仏教」の四つのプロトタイプ(今後のたたき台になりうるさまざまなプロジェクト)(第四章)、仏教パーや寺院主催のコンサート、ファッションショーなど、これまでと違う革新的な宗教慣行(第五章)について書き進める。そして最後に、水晶玉をのぞきこむように日本の仏教寺院の未来を占つてたどりついたのは、「くもりときどき晴れ、しだいに風雨が強まる」(p.215)という予報だった。

本書はさまざまな革新的活動の実例をたくさん提供してくれる非常に面白い本で、日本の宗教を研究する人なら誰もが読みたい一冊である。ここでは、著者のおかげで開かれたこの分野の

研究をさらに深める一助になればと思つて、以下四点を指摘したい。第一に、著者は「民族的なフィールドワークに重点を置いた」と言うが、そのフィールドワークでとりあげられているのは僧侶の声ばかりで、彼らは主として自分たちの寺のことしか視野にない。著者自身、「この研究にはふつうの人々の意見が欠けている」(p.5)と述べているが、その理由をはるかに膨大なリサーチが必要だからだという。さらに腑に落ちないのは、仏教の諸宗派でも古いアカデミズムでも女性の姿が見えないのはよくあることだとしても、この研究の構想から僧侶の妻という存在が抜け落ちているのはなぜだろうという点だ。著者が指摘するように (p.103)

〔僧侶の妻は〕夫と檀家のあいだをとりもつ存在である。浄土真宗では僧侶の妻は「坊守^{ぼうもり}」と呼ばれているが、どの宗派でも妻たちは広範にわたる責務を負わされている。彼女らはふつう寺の女性や子ども関係の活動に関わり、地区の僧侶の妻の集会に出席し、(葬儀のような重要職務を含む) 寺の運営においてすべての面で夫を補佐し、理事会や檀家の妻たちと良い関係を保つように努力するが、この貢献に対する報酬はわずかで、まったく無料奉仕のことも多い。

僧侶は夫でもあるので、身内である妻の影響をうけやすい。だか

ら「実験仏教」における妻の役割について、当然説明があるものと思いきや、本書ではほとんどの場合、妻どころか、その僧侶が妻帯者であるか否かすら明記されていない。「実験仏教」には僧侶個人の「非伝統的背景」が関係していると著者が記している以上 (p.216, n.29)、変数としての配偶者からの影響が不問に付されているのは残念なことだと思う。

第二に、「実験仏教」がマクマハンのいう「仏教モダニズム」の発展型であり、二十一世紀への転換期に特有のプロセスを語るキーワードである (pp.26-27) という彼の主張には、異義を唱えない。現代の世界は異界さながらの別世界になってしまったかもしれないが、日本の仏教者たちは今になってようやく実験を始めたわけではない。十九世紀から二十世紀への変わり目の時代に日本に滞在したアイルランド人僧侶 (ダンマローカ) やチャールズ・フォンデスについて私自身が行なったささやかな研究からは、当時の日本では多くの仏教者たちが気力に満ち、独立心旺盛で、急進的、革新的であり、その視野も関心事もグローバルだったことがわかる。明治期、日本の急激に変化する社会・宗教・政治の文脈における彼らの仏教の実験は、マス化した印刷メディア、鉄道や蒸気船による世界旅行の利便性の拡大、そして忘れられがちだが、電信網 (またの名をヴィクトリア時代のインターネット) の発達による即時的な諸国間通信などの技術革新に刺激されたものだった。

た。

第三に、「実験仏教」という言葉は、私の知る限り、宗教者の側から認められた客観性のある分析的学術用語とは (まだ?) 言えない。であるからには、この宗教カテゴリーから創価学会、真如苑、立正佼成会といった戦後の「成功した」「新宗教」を外してしまっってはまずいだらう。これらの新宗教はみな、仏教を大衆向けに仕立て直した実験として始まった。ゆえに「実験仏教」を今日の「伝統的」寺院と僧侶にかぎったのでは小手先の研究プロジェクトに墮してしまい、日本のデータから構築した概念にはなりえないと思う。

最後に、本書では仏教の実験と個人的に関わった神道の神官二人について軽く触れている。しかし、神道についての言及がこの程度では、日本では九千六百万人の仏教徒と一億六百万人の神道信者が (宗教組織は信者の数を多めに申告する) ほとんど重なっており、仏教と神道の機能分離があいまいであることが、ともすれば忘れられはしないか。日本の仏教と神道はともに同じ問題に直面している。どなたか「実験神道」の本を書いてはいかが？

*本稿は *Japan Review* 28 (2015) に掲載された英文テキストの日本語訳である。
(朝倉和子 訳)